Antony and Cleopatra における Serpent-images

中　村　六　男*

Mutsuo NAKAMURA :The Serpent-images in *Antony and Cleopatra*

(1958年9月20日受理)

(1)

Imageを論ずる際に,物理学上のimageを考慮外として,文学上では凡そ三つの観点が考えられる。心理学的,修辞学的,および芸術的な観点からそれぞれみたimageである。心理学的観点からみたimage即ち記憶心像とか想像心像とかは作品の理解鑑賞上には直接には役立たず,ただ補助的な役目をするだけである。文学上重要なのは修辞学的および芸術的観点からみたimageである。

修辞学的にみたimageとは文章を効果的に書く技巧として用いられたimageである。simile (明喩), metaphor (隠喩) を始めとして, personification (擬人法), metonymy (換喩), synecdoche (代喩), allegory(譬喩), parable (比喩), allusion (引喩) などで用いられているimageである。しかしこの観点からみたimageは単に表現技巧として形式的に外部的に観察され,取扱われるものであって, 作品の本質との関係からは眺められない。もしそれが内容的に, 構成的に, 本質的に観察され,それから作品の芸術的,思想的特質および作品の構成的特徴,芸術的手法および様式,芸術的価値,更に作家の個性などを検討する場合は,明喩,隠喩其他に用いられているimageは芸術的観点からみたimageとなる。

さてそれならば文学上で論ぜられるimageにはどの様な定義づけをしたならばよいであろうか。簡明にしかも適切に下された定義は何処にも見当らない。Caroline F. E. Spurgeon も (*Shakespeare's Imagery* p. 5),「私は'image'という用語を実際には圧縮された明喩即ち隠喩のあらゆる種類と同時に各種の明喩をも包括するのに役立つ唯一つの言葉として此処では用いる。imageなる用語が帯びている視覚形像だけについての暗示を私達の心から捨て去り,此処では,何等かの感覚を通じてのみならず,同様に詩人の精神及び情緒を通じて,詩人の心に生起して来たであろうし,また詩人が最も広義に解しての明喩及び隠喩という形体で類比の目的のために使用する,あらゆるやりかたで描かれた,一切の想像心像や其他の経験をも暗に意味するものとしてimageを考えるように提言する。」

と述べ,それに引き続いてimageの定義を簡単明確に下すことの容易ならざることと,更にまた定義を下すことの無益なることを説いている。

それゆえimageの定義を下すようなことはせずに,大体前述のSpurgeonの様な意味に文学上のimageを解して, Shakespeareの悲劇 *Antony and Cleopatra* に用いられているimagesを考察してみると, "……it is a pure flame driving throughout, fanned by emotion, whose heat purifies, fuses and transmutes into gold all kinds of material, and it is this fierce atmospheric heat which creates the pictures, dominating and directing them." と適切なるこの悲劇に対する評言を述べ,それに用いられているimagesの特徴については, "The group of images in *Antony and Cleopatra* which, on analysis, immediately attracts attention as peculiar to this play, consists of images of the world, the firmament, the ocean, and vastness generally. That is the dominating note in the play, magnificence and grandeur, expressed in many ways and pictured by continually stimulating our imaginations to see the colossal figure of Antony, ……" とSpurgeonはその著書 *Shakespeare's Imagery* (pp. 349～350) で述べている通りに, 実際この悲劇で用いられているimagesは地球,大洋,大河,山脈,蒼穹,宇宙,太陽,月,星,雲といった巨大なもの,広大なものを表わすimagesであり,しかも主要登場人物で

* 信州大学繊維学部英語研究室

ある Antony や Cleopatra が感情の昂揚した時とか，絶望状態になつた時とか，危機に際会した時などに用いられて居り，そうした時の彼等の心情の尋常ならざることを示すと同時に登場人物の偉大性，壮大性を示している。また場面も当時のローマ帝国の殆んど全域即ち当時知られていた世界の殆んど全体にわたつている。もともと広大さを表わす imagery を用いるのが Shakespeare の悲劇の特徴と云われているが，特にこの悲劇では極端とも云うべき広大性を表わす imagery を用いているのが一大特徴である。それは現世を超越して来世を設定し，現世の死を通じて来世換言すれば永遠の世界に再生していく主人公達を描くこの悲劇のテーマに適しているからでもある。しかしながらこの様に極端までに広大性を表わす imagery のみでこの悲劇に用いられている imagery の特徴を充分に説明し尽しているとは考えられない。更にそれらの外にこの悲劇に用いられている imagery の特徴の一つとして serpent-images を考察することがこの悲劇を理解し鑑賞する上に極めて大切であると考えられる。

（2）

Antony and Cleopatra は二つの極を持つている。場所的に云うならば，その一つはローマ帝国の中心ローマであり，他は東方の国エジプトのアレキサンドリアである。人物上から云うと Octavius と Cleopatra とである。本質上から云うと戦争（或は権力或は政治）と愛（或は恋或は美）とである。G. Wilson Knight の言葉を借りて云えば，the imperial theme of government と the imperial theme of love とである（cf. G. Wilson Knight : *The Imperial Theme*, p. 19）。彼によると，

> The two main elements of this play's vision——War, or Empire, and Love——though they are opposed in action, are not always opposed imaginatively. Every fine effect of each contributes to the total splendour and unity within and from which each in turn draws imaginative sustenance. Each and all is heavily gilded, glorified. The final result is that the love-theme rises high in splendour on the structure of imperial and military magnificence. (*op. cit.* p. 214)

とある様に，この二つの極である imperial themes のすばらしい効果がすべて内部における全体的な壮麗さと調和統一とに互に寄与し合い，それより各々 theme は想像的精(くわ)を交互に引き出しており，すべてが絢爛たる光輝に彩られ，最後には帝国的な軍事的な壮麗なる構造の上に愛の theme が燦然たる光輝を放つて高く聳え立つ結果となるのである。換言すれば両極はすばらしい効果をおさめて混合し，統一するのである。しかしながらこの様な効果をおさめて融合統一するに至らしめるそもそもの原因は何であるか。その理由は偉大なる愛の人間であり同時に軍人である Antony がこの二つの imperial themes の間を絶えず "wavering" していることにあると考えられる。即ちこの両極の間を Antony が蛇行して進み，遂に両極が融合統一した時は彼の死であり，Cleopatra の死であつて，愛の勝利が皇帝的な政治的な名誉的な基盤の上に永遠的なる光彩を放つているのがこの悲劇の *leitmotif* をなしている。この様に Antony が常に二つのテーマの間を動揺し，蛇が蛇行する様に進むのがこの悲劇の一大特徴である。更にまた場面も Antony の動揺に応じて常に蛇行的に変つていく様に組み立てられている。Act 1. sc. i, ii, iii (Alexandria) ⟶ sc. iv (Rome)⟶sc. v (Alexandria)⟶Act 11, sc. i (Messina)⟶sc. ii, iii, iv (Rome) ⟶sc. v (Alexandria)⟶sc. vi, vii (Misenum), Act Ⅲ. sc i. (Syria) ⟶sc. ii (Rome)⟶sc. iii (Alexandria) ⟶sc. iv, v (Athens)⟶sc. vi (Rome)⟶sc. vii, viii, ix, x (Actium) ⟶sc. xi (Alexandria), xii (Egypt), xiii (Alexandria), Act iv (Alexandria or near it), Act V (Alexandria) の様に場面の置き方もローマとエジプトの間を蛇行的に変転させて，最後の幕でアレキサンドリアに集中させている。更にまたローマの民衆の心も，

> This common body
> Like to a vagabond flag upon the stream,
> Goes to, and back, lackeying the varying tide,
> To rot itself with motion. (1. iv. 44—49)

と Caesar の言葉にある如く常に動揺している。また登場人物の運命も多少の相異はあるが悉く変動する。更にナイル河はこの悲劇の重要な背景をなしていると考えられるのであるが，これもまた左右に蛇行して流れている。この様に考えるとこの戯曲は左右或は上下に変動し，蛇行的に進展するのが一つの特徴である。或る一つのことが原因となつてその結果を生じ，その結果が更に原因となつてまたその結果を生み，そうしたことが繰返されて遂に大団円に達するといつた様な時間を契機として原因結果と直線的に進展していく悲劇ではなく，時間的要素が稀薄であつて寧ろ空間的要素が濃厚となつておつ

て，場面の変転と共に事件も主人公の心も蛇行的に進展して行き，遂に永遠性に到達するといつた悲劇である。この様な特徴がこの悲劇の基盤をなしているのであるから自然と serpent-images が使用されやすいと云わなければならない。

しからばどの様に serpent-images がこの悲劇では用いられているだろうか。

Sooth. You shall outlive the lady whom you serve.
Char. O excellent, I love long life better than figs. (1. i 31～2)

と云う言葉が始めの方に出て来る。この言葉は卜者がクレオパトラの侍女の Charmian の運命を占つての言葉であつて，figs と云う語はこの場合は種々な意味を含めていると考えられるが，やはり聖書の Genesis Ⅲに Adam と Eve とが蛇の誘惑によつて禁断の木の実を食つて，

And the eyes of them both were opened, and they knew that they were naked, and they sewed fig-leaves together, and made themselves aprons. (Gen. iii. 7)

とあることより，蛇に関係がある様に思われる。また第五幕第五場にある様にクレオパトラと Charmian とが身を咬まして死んだ毒蛇を田舎者が figs（無花果）の籠にしのばせて来たことにも関連がある様に思われる。明瞭にはserpent-images を用いていないが無花果は蛇を連想として思い起させるのである。

Ant. She is cunning past man's thought.
Eno. Alack, sir, no, her passions are made of nothing but the finest part of pure love. (1. ii. 143～5)

と云う言葉は聖書の Now the serpent was more subtle than any beast of the which Jehovah God had made. (*Gen* iii. 1) や，Be ye therefore wise as serpents, and harmless as doves.(*Matt.* x. 16)と，多少言葉は異つているが，関連を持つており，やはり serpent-images を暗示しているのではないかと思われる。しかしながら未だ明瞭にはそれらの例では serpent-images は使われていないで，Shakespeare の心中の潜在意識的な域で蛇と密接に関連していたと思われる。

Antony が Sextus Pompeius が擡頭して来て，ローマを脅かしている事態を説明する段になると明瞭に serpent-images が使われる様になる。

Much is breeding,
Which like the courser's hair, hath yet but life,
And not a serpent's poison. (1. ii. 190～2)

と Antony は事態を説明する。またクレオパトラも，

He's speaking now,
Or murmuring, "Where's my serpent of Old Nile?"
For so he calls me. Now I feed myself
With most delicious poison. (1. v. 24～7)

と，Antony が女王をナイル河の蛇に例えて呼んだと云つて Antony を懐かしみ，独り寝のやるせなさをやはり蛇と関連のある毒薬で忘れさせようとしている。此処に至つて女王はすつかり serpent-image によつて表現されるにいたつたのである。

三巨頭会談の際に Antony は，

Neglected, rather;
And then when poisoned hours had bound me up
From mine own knowledge; as nearly as I may
I'll play the penitent to you. (11. ii. 89～92)

とクレオパトラの許に居つた時は，女王を蛇と目してその毒にあてられていたのだと言い訳をしている。

クレオパトラは Antony の安否を気づかつて，使者に，

But there's no goodness in thy face if Antony
Be free and healthful, ——so tart a faovur
To trumpet such good tidings! If not well
Thou shouldst come like a Fury crown'd with snakes,
Not like a formal man. (11. v. 36～40)

と云い，snakes を用いて Fury を表現する旧来の方法によつて，serpent-image を poetic image として使つている。更にまた Antony が Octavia と結婚したという報告を受けると，女王は serpent-image を用いて，

Some innocents 'scape not the thunderbolt:
Melt Egypt into Nile! and kindly creatures
Turn all to serpents! (11. v. 75～7)

と激怒の叫びをあげ，さらに

O, I would thou didst,
So half my Egypt were submerg'd and made
A cistern for scal'd snakes! Go get thee hence,
Hadst thou Narcissus in thy face, to me
Thou wouldst appeare most ugly. (11. v. 93～7)

とも云つてその怒りを使者に向けている。

三巨頭と Pompey との軍事会談後，Pompeyのgalley 船上での講和成立祝賀の宴の席上で，

Lep. Y'have strange serpents there ?
Ant. Ay, Lepidus.
Lep. Your serpent of Egypt is bred now of your mud by the operation of your sun: so is your crocodile.
Ant. They are so. (11. vii. 24～8)
Lep. What manner o' thing is your crocodile?
Ant. It is shap'd, sir, like itself, and it is as broad as it hath breadth; it is just so high as it is, and moves with it own organs. It lives by that which nourisheth it, and the elements once out of it, it transmigrates.
Lep. What colour is it of ?
Ant. Of it own colour too.
Lep. 'Tis a strange serpent.
Ant. 'Tis so, and the tears of it are wet. (11. vii. 40～9)

と serpents の国とみられていた Egypt の snakes や crocodile が話題に上り，同時にその国の女王たるクレオパトラを暗に仄めかしているが，その裏面では Pompey の部下である Menas がその船の綱を切って神に出し，三巨頭とその一味を暗殺して Pompey に天下を取らせようとの危険な計画がひそんでいる。serpents の cunning と危険性とより，裏面の危険性を巧みに暗示しているのである。この場面では serpent-images は全く申分なく dramatic image として使用されている。

Antony が最後の戦いに敗れ，クレオパトラに裏切られたと考え，悲嘆にくれる言葉には

Sometimes we see a cloud that's dragonish,
A vapour sometime, like a bear, or lion,
A tower'd citadel, a pendent rock,
A forked mountain, or blue promontory
With trees upon't, that nod unto the world,
And mock our eyes with air (IV. xiv. 2～7)

と自己を浮雲に例え，雲のただづまいを，serpent-image を poetic image として用いて，述べている。

クレオパトラも

I dare not, dear,
Dear my lord, pardon : I dare not,
Lest I be taken: not the imperious show
Of the full-fortun'd Caesar ever shall
Be brooch'd with me, if knife, drugs, serpents, have
Edge, sting, or operation. (IV. xv. 21～6)

と Caesar の捕虜となって彼のローマ凱旋を飾る手段とは決してされないとの決意をやはり poetic image として serpent-image を使って述べている。

以上挙げた例では serpents は image として用いられているのであるが，第五幕になると serpents は image としてではなく，serpents その物が舞台に登場して来て重要な役割を果すことになる。

Guard. Here is a rural fellow,
That will not be denied your highness' presence,
He brings you figs.
cleo. Let him come in. [*Exit Guardsman.*
What poor an instrument
May do a noble deed! he brings me liberty:
My resolution's plac'd, and I have nothing
Of woman in me: now from head to foot
I am marble-constant: now the fleeting moon
No planet is of mine.

Re-enter Guardsman, with Clown bringing in a basket.

Guard. This is the man.
Cleo. Avoid, and leave him. [*Exit Guardsman,*
Hast thou the pretty worm of Nilus there,
That kills and pains not ?
Clown. Truly I have him : but I would not be the party that should desire you to touch him, his biting is immortal: those that do die of it, do seldom or never recover.
Cleo. Remember'st thou any that have died on't ?
Clown. Very many, men and women too. I heard of one of them no longer than yesterday, a very honest woman, but something given to lie, as a woman should not do, but in the way of honesty, how she died of the biting of it, what pain she felt: truly, she makes a very good report o' the worm : but he that will believe all that they say,

shall
never be saved by half that they do: but this is most falliable, the worm's an odd worm.

Cleo. Get thee hence, farewell.

Clown. I wish you all joy of the worm.
〔*Setting down his basket.*〕

Cleo. Farewell.

Clown. You must think this, look you, that the worm will do his kind.

Cleo. Ay, ay, farewell.

Clown. Look You, the worm is not to be trusted, but in
the keeping of wise people: for indeed, there is no
goodness in the worm.

Cleo. Take thou no care, it shall be heeded.

Clown. Very good: give it nothing, I pray you, for it is
not worth the feeding.

Cleo. Will it eat me?

Clown. You must not think I am so simple but I know the devil himself will not eat a woman: I know,
that a woman is a dish for the gods, if the devil
dress her not. But truly, these same whoreson devils do the gods great harm in their women: for
in every ten that they make, the devils mar five.

Cleo. Well, get thee gone, farewell.

Clown. Yes, forsooth: I wish you joy o' the worm.
〔*Exit.*

Re-enten Charmian *and* Iras *with a robe, crown, and other jewels.*

Cleo. Give me my robe, put on my crown, I have
Immortal longings in me. Now no more
The juice of Egypt's grape shall moist this lip.
(V. ii. 232～281)

とある様に，田舎者が無花果の籠に毒蛇をしのばせて来て女王に渡し，humorous ではあるが意味深長で多くの問題を含む場面を展開して立ち去る。そして遂に，

Cleo. Farewell, kind Charmian, Iras, long farewell,
〔*Kisses them. Iras fall and dies.*
Have I the aspic in my lips ? Dost fall?
(V. ii. 291～3)

Cleo. Come, thou motal wretch,
〔*To an asp, which she applies to her breast.*
With the sharp teeth this knot intrinsicate
Of life at once untie: poor venomous fool,
Be angry, and despatch. O couldst thou speak,
That I might hear thee call great Caesar ass,
Unpolicied! (V. ii. 303～8)

の様に蛇は舞台に姿を現わし，登場人物にも劣らぬ興味を持った奇怪な役割を演ずることになる。

Cleo. Peace, peace!
Dost thou not see my babe at my breast
That sucks the nurse asleep. (V. ii. 308～310)

Cles. As sweet as balm, as soft as air, as gentle,
O Antony! Nay, I will take thee too.
〔*Applying another asp to her arm.*
What should I stay —— 〔*Dies.*

Char. In this vile world. (V. ii. 310～313)

と幼児を育てる乳母が赤ん坊に添え乳をしながら自分でも眠ってしまうという image，換言するならば，クレオパトラが云わば大蛇となって子の蛇を愛撫しながら眠るという様な静かな image をもって女王の死を Shakespeare は描いている。また Charmian も，

Char. 〔*Applies an asp.*
O, come apace, despatch, I faintly feel thee.
(V. ii. 321)

と毒蛇に身を咬ませ，女王の自殺について，

Char. It is well done, and fitting for a princess
Descended of so many royal kings.
Ah, soldier! 〔*Dies.* (V. ii. 325～7)

と云って満足そうに死んでいく。

この様にして Alexander 大王以来続いたエジプトの有名は Ptolemy 王朝の最後の主権者であるクレオパトラは死に，その王朝は断絶したのである。この王朝断絶の役割を果した Asps は忽然として舞台上から姿を消してしまい，非常に神秘的な感じを与える。そしてただ

First Guard. This is an aspics trail, and these fig-leaves
Have slime upon them, such as aspic leaves
Upon the caves of Nile. (V. ii. 249～251)

とある様に，無花果の葉の上にかすかな痕跡を留めたの

みであつた。

以上挙げた諸例から解る様に，serpent-images は劇の始めの方では作者の心中には明瞭に意識に浮んで描写に使われているとは云えない。それを連想させるに好都合な人物の動き，劇の構造，国土，主人公の性格などから次第に serpent-images は作者の意識に浮び上つて来るのである。そしてやがてそれは所謂 poetic images として用いられ，同時に所謂 dramatic images に転化され，劇其物の中に有機に融け込んで行く。一方またクレオパトラは毒蛇に身を咬まして死んだという史実と相俟つて，serpent-images は現実に舞台上に現われて重要な役割を演ずる serpents 其物へと発展変化しているのである。

（3）

この悲劇に使用されている serpent-images を真によく理解するには，shakespeare 時代の人々が serpent に対してどの様な連想を懐いていたかを知らなければならない。しかしながら人間の物に対する連想は物自体に人間が接して受ける感じ，即ち感覚を通じて惹起された記憶心像や想像心像による連想ばかりでなく，人間が遠い昔からその物に結び付けて来た，伝説や文芸作品などによつて伝えて来た，伝統的連想をも知らなければならない。そこで Stanley Arthur Cook (*The Encyclopaedia Britannica. Vol.* xxv. *Serpent-worship*) と Emma Phipson (*Animal-Lore of Shakespeare's Time*) の述べる所を参照することによつて serpent に対する当時の人々のいだいたであろうと思われる連想を簡略に述べることにする。

当時の人々は serpent という語で何を意味していたのだろう。By serpents we understand in this discourse all venomous beasts, whether creeping without legs, as adders, and snakes, or with legs, as crocodiles and lizards, or more neerly compacted bodies, as toades, spiders, and bees …… Aristotle and Galen define a serpent to be *animal sanquineum pedibus orbatum et oviparum*, that is, a bloudy beast without feet, yet laying eggs; and so properly is a serpent to be understood …… And thus much for the name in general, which in Holy Scripture is Englished a creeping thing, (Topsell: *General Treatise of Serpents*. p. 598)と云う文章を Emma Phipson は挙げて serpent の定義としている。それによつて明らかな如く当時の人々は serpent を一般的には今日よりも広い意味に解していた様である。この悲劇でも serpent は今日よりも広く解されていることがさきに挙げた例からも知ることが出来る。それで snake, blind worm, adder, asp, boa, crocodile, lizard, salamander, sea-serpent など実際に存在する動物は勿論，dragon, basilisk, cockatrice, wyvern, fire-drake など伝説的・想像的動物をも含めてよさそうである。

serpents は川や湖沼，其他水のある所に多く住むと考えられていた。蛇類の蛇行する動作が川の曲つて流れるのと恰好が似ているのがその理由であつたらしいが，兎に角古代から serpents は水と深い関係を持つていた。特に Shakespeare 時代の人々はナイル河は鰐を始めとしてあらゆる種類の serpents が最も多く住む場所と考えていたようである。要するにエジプトは serpents の国とも云い得るので，其処の女王を Antony は 'my serpent of Old Nile と呼んだとこの劇にあるのも当時の英国人には当然のことと考えられたであろう。またこの悲劇では serpents が images として用いられる場合はエジプトや女王が場面や登場人物になつている場合か，或はそれらが話題になつている場合に限られておつて，エジプト以外の場所が場面となつており，エジプトや女王が話題になつていない時には用いられていないことに注意すべきである。

クレオパトラはさきに挙げた例で，the pretty worm of Nilus とasp を呼んでいるが，serpent は大体から云つて美しい色彩や模様を持つた美しい動物である。しかしながら多くは毒や毒気を持つていると考えられていた。ところが毒は使用法に依つては薬ともなる。昔は serpents は死者を甦らせる草の根を知つて居り，また serpents 自体も人間の病気を治癒する力があるとギリシヤ，ローマは勿論北欧でも信じられていた。Theodosius や Siegfried にまつわる伝説はこうした信仰を立証している。当時の英国人もそんな風に蛇を考えていたようである。それ故に serpents は美しいが人間には非常に危険な動物であり，気味の悪さと恐怖心を起させるが，反面人間の病気其他の悩みごとを治癒し，死者をも蘇生させる術をも知つていて，人間に恵を与えるものであると考えられていた。

また serpents の雌雄は仲が非常に睦まじいものとされていた。このことは蛇の雌雄について，

Between the male and female is such love
As is betwixt the most kind turtle dove. (Chester: *Love's Martyer*. p. 114) と歌つた詩からも知るこ

とが出来る。

Shakespeare がクレオパトラを serpent-image で表現しているのは，女王が美しく毒気の様な魅力で Antony を魅惑し，現世的な観点から云えば政治的に不名誉極まる失脚をさせて遂にその生命をも間接的に奪つたことになるが，同時に永遠的な人間的な観点から云えば，熱烈な不変で広大な愛の力で Antony の魂を救い出し，失つた総てを回復させながら満足せる心を持つて永遠の楽土に旅立たせ，自らも asps によつて Antony の往つた所へとやはり王者としての尊厳と名誉を回復しながら静かに彼の後を追つて行つたことを最も効果的に表現するために，当時の人々の serpents に対する連想を利用したためであると考えられるのである。

serpents はまた賢明であるとも考えられていた。この動物は本性上非常に用心深いと云われ，おのづから賢明な動物と見做されるに至つたようである。こうした考えはギリシヤ時代の昔にもあつて，serpent は Sophia と同一視されたとも云われ，また神の託宣（oracles）とも関係づけられたとも云われている。もともとserpents は原始時代には神として崇められ，神秘化されたことがあつた。そうした serpent-worship の信仰は今日もなお東洋に多く残つており，神社仏閣にその面影を見ることが出来る。キリスト教がこうした信仰に挑戦した痕跡とも見るべき箇所がさきに述べた様に聖書（Gen. Ⅲ. 1, 2Cor. XI. 3, Matt. X. 16）にあり，其処では悪と結びつけられて，serpent は subtle, cunning とされている。serpent は魔王 Satan の化身であり，Adam と Eve とを知識を餌にして誘惑し，遂に原罪を犯さしめ，人間を堕落せしめたと，serpents を悪く考えると同時に，他面には古代から伝わつていると考えられる serpents を賢明と考える考え方が当時の人々の間に確かにあつたのである。Shakespeare がクレオパトラを serpent-image をもつて表わしたのは，こうした serpent に対する賢明であると共に subtle であると考える連想を利用して，女王のそれら両者の性質を有する性格を巧みに表現し，また女王が Antony を堕落させたとする旧来の歴史的見方と Antony の魂を永遠の楽土に救つてやつたとするこの悲劇の本当の彼の考え方との両者を表わすためでもあつたと考えるのは余りに考え過ぎている見方であろうか。

serpents は不死であり，復活するとも考えられていた。serpents は一般に長命の方であり，死んだ様に見えてもやがて脱皮して動き出すので，不死とか復活とか云つた観念と結び付けられる様になつたらしい。古代のフェニキア人は serpents を不死の象徴とし，イスラエルでは所謂 'the tree of life,' と関係づけた。Shakespeare 時代の人々は蛇が幾年かたつと巨大になり，やがて足を生じ，同時に翼を持つ様になると考えていたことを Phipson は述べている（*cf. op. cit.* p. 317）。これは蛇は年を取れば竜となり不死となることを意味する。さきに挙げた例に，田舎者が無花果の籠に毒蛇をしのばせて来て女王に渡す場面がある。この男はこの毒蛇に咬まれると致死的（mortal）であると云うべきを言葉を間違えて不死的（immortal）であると云う（v. ii. 245～6）。それをうけてクレオパトラはいよいよ死のうとする寸前に「私は不死へのあこがれをいだいているのだ。」（v. ii. 279～280）と云い，「私は今は火と空気になつた。私は他の元素は卑しいこの世に残して行く。」（v. ii. 288～9）と云うのは糞土より形成されているこの地上を這いまわる serpent より脱皮して天空を翔ける dragon となり，不死となることを願うという意味に解される。換言すれば毒蛇に咬まれて，死という脱皮によつて浄化され，運命の支配する卑しい現世から脱出して永遠不死の世界に復活することを意味しているのである。

serpents は富や財宝と関連を持つ。特に竜とか火竜は財宝を守つているとか，口中に宝石を持つているとかいつた考えは古代のエジプトは勿論，*Beowulf* にも見られる様に，北欧にもあつた。この悲劇では財宝は重要な要素をなしている。Antony や Cleopatra が部下に金（きん）とか其他の財宝を与える場面が多く，特に女王の周辺は常に財宝が豊かである様に表現されており，また女王は Antony を彼女の 'jewel' （iv. xv. 78）とも云つている。第五幕第二場の女王が財宝を勝者たる Caesar に引き渡す所謂 Seleucus の場面はこの劇中では可なりの重要性を持つている。戦に敗れて征服された者は勝者に一切の財宝を譲り渡すのが古代の風習であつたとはいえ，ただそれだけの理由でこの様にこの場面が重要性を帯びさせられているとは考えられない。その理由の一つには女王は serpent-image で表現され，serpents は財宝に深い関連を持つていたことが考えられる。

serpents は更に執念深さ，復讐，女性，Bacchus の酒盛，葡萄の収穫，冥府の神，英雄，其他種々なることに深い関連性を持つているものと考えられていた。以上の様な serpents が当時の人々に連想として呼び起す種種なる想念を Shakespeare は巧みに用いてこの悲劇を作り上げているのである。

4

前述の様に *Antony and Cleopatra* はそれが扱つている頃の殆んど全世界を舞台としており，その中心はローマとアレキサンドリアであり，主題も政治と恋愛との二つであり，その間を Antony は常に蛇行し，主要人物の運命も絶えず動揺している。そうして最後には舞台も専らエジプトが中心となり，主題も恋愛の主題のもとに止揚されている。またこの悲劇の扱つている題材は歴史上毒蛇にエジプトの女王が胸を咬ませて Ptolemy 王朝の最後の君主として最後をとげるということになつている。更に Shakespeare 時代の人々にはエジプトは serpents の最も多く住む代表的な国であると考えられ，特にナイル河はそうであつた。其故に serpent-images は自然と用いられやすい作品であつた。それで始めのうちは serpent-images は作者の潜在意識のもとに存在していて作品上には明瞭には表われて来ないのであるが，やがて，文章を飾り，文意を適切に表現し，感じを強く表現するために，作品の本質とは関係なく外部的に挿入される所謂 poetic image (*cf.* Wolfgang H. Clemen: *The Development of Shakespeare's Imagery*. p. 81) として主として用いられたが，やがてそれらはこの悲劇の一つの中心であるエジプトや恋愛の主題の場合に限つて用いられ，同時にクレオパトラの性格や行動を表わすのに不可分の関係を持ち，この劇の雰囲気や mood をかもし出す重要な要素となり，戯曲全体と有機的な関係を帯びる様になる。即ち serpent-images は dramatic imagery (cf. *op. cit.* p. 164) と変つて来る。そして最後には serpents は単に images として使用されているのみでなく，実際に舞台上に登場して劇の行動や筋や motive の上から云つても重要な役割を果し，忽然として姿を消してしまう。

serpent-images がこの悲劇では如何に適切に使用され，また serpents が如何に重要な役割を果しているかを知るためにはこの戯曲の source と考えられている North 訳の Plutarch の *Lives* と比較する必要があろう。Plutarch では serpent は二箇所に出てくる。

Actium の戦いの後の処に，

..... she afterwardes went about to prove the stinging of snakes and adders, and made some to be applied unto men in her sight, some in one sorte, and some in an other. So when she had dayly made divers and sundrie proofs, she found none of all them she had proved so fit, as the biting of an Aspicke, the which only causeth a heaviness of the head, without swounding or complaining, and bringeth a great desire also to sleepe, with a litle swet in the face, and so by litle and litle taketh away the sences and vitall powers, no living creature perceiving that the pacientes feele any paine. For they are so sorie when any bodie waketh them, and taketh them up : as those that being taken out of a sounde sleepe, are very heavy and desirous to sleep.

と蛇の毒の力を実験をしてみて，女王が Aspick の毒性について発見したことを述べている箇所と，最後の部分の，

Some report that this Aspicke was brought unto her in the basket with figs, and that she had commaunded them to hide it under the figge leaves, that when she shoulde thinke to take out the figges, the Aspicke shoulde bite her before she should see her : howbeit, that when she would have taken away the leaves for the figges, she perceived it, and said, Art thou here then? And so her arme being naked, she put it to the Aspicke to be bitten. Other say againe, she kept it in a boxe, and that she did pricke and thrust it with a spindell of golde, so that the Aspicke being angered withall, lept out with great furie, and bitte her in the arme. Howbeit few can tell the troth. For they report also, that she had hidden poyson in a hollow razer which she caried in the heare of her head:and yet was there no marke seene of her bodie, or any signe discerned that was poysoned, neither also did they finde this serpent in her tombe. But it was reported only, that there were seene certeine fresh steppes or trackes where it had gone, on the tombe side toward the sea, and specially by the dores side. Some say also, that they found two litle pretie bytings in her arms, scant to be discerned: the which it seemeth Caesar him selfe gave credit unto, bicause in his triumphe he caried Cleopatraes image, with an Aspicke byting of her arme.

という女王の死の原因について叙している箇所とである。Plutarch では女王の死は蛇によるとは断言しても

いないし，また勿論 serpent-images などは全然用いていない。

Shakespeare がこの悲劇で serpens-images や serpents を用いているのは serpents が古代より彼の時代に至るまで人々に呼び起す連想を用いて，この劇の出所である史上の事柄とよく調和させながら，人物の性格や *leitmoti*f や其他の劇的機能を表現したり果させたりしたことにあるのは前述の通りである。一例を女王の性格の一部たる愛情に取つて見る。王者と雖も女王は人間であるから，当時の人々の考え通り女王は動物的要素を性格の中に持ち，同時にまた天使的な要素をも含む。それゆえに恋に生きた女王の愛も動物的性愛から天使的清浄広大な愛に至るまでの愛の全体をその性格の中に内蔵している。それが死によつて土水的要素を捨てさり空火的な要素だけから成り立つ愛に純化されるのである。女王の性格は serpents の連想としてさきに例挙したものをすべて具有し充実させて居る様に描かれているのであるから，snake が dragon に変るという考えから云うならば，何等不自然さが感じられなく理解が出来るのである。

G. Wilson Knight はこの悲劇は the life-in-death victory だと云う（*The Imperial Theme*. p. 30）。Adam と Eve とが天上の楽園において knowledge を得るために蛇の誘惑を受けて禁断の果実を食う。しかも Adam は Eve の勧めによつてそれをなす。そして二人とも楽園から神によつて逐放される。これが原罪による人間の fall であるとするならば，この悲劇は，表面的には Antony と Cleopatra との fall である様に見えるが，実は彼等の愛の力に依つて，特に女性たる Cleopatra の愛によつて，やはり蛇を介して，死によつて運命を克服し，永遠の楽土への蘇生であり復帰であり，人間の rise であると考えることが出来よう。この様にみるならば観衆は容易にこの悲劇を受け容ることも出来るし，また吾々は serpent-images がこの悲劇で重要な役割を演じている所以も自ら会得出来るのではないだろうか。

しかしながらこの作品は Knight の云う様に the Everest of Shakespearian drama であり，probably the subtlest and greatest play in Shakespeare, or, at least, paragoned only by *The Tempest* であつて，ただ serpent-images や serpentsのみからこの最大傑作を充分に理解鑑賞が出来ると考えるならば重大な誤を犯すことになることは勿論である。が少くとも serpent-images の面から観察してみることにも，この奇異にして偉大な作品の奥秘に迫る扉を開く数多き鍵のうちの一つがあると思われる。